

音読訓練による読解力の変化と 学習者の自己評価分析

神	田	明	延	（首都大学東京）
山	口	高	嶺	（早稲田大学）
湯	舟	英	一	（東洋大学）
田	淵	龍	二	（ミント音声教育研究所）
池	山	和	子	（恵泉女学園大学）
鈴	木	政	浩	（西武文理大学）

本発表は、外国語として英語を学ぶ日本人大学生に対して一斉音読処遇を、2011年度に10分程度行った群と、単に速読処遇を行った群を比較しながら、読解正解率、WPM、読解効率、リスニング力の変化について行った報告（神田他 2012）に引き続き、1年間の授業終了時に学習者へ行った自己評価アンケートとの関連を報告し、授業終了時点での英語力による自己評価結果の違いを分析・報告する。

今回分析対象の学習者は、異なる大学、異なる教員による英語の授業の一部として10分程度の処遇が行われた。1年間4回にわたる英語力判定テストをすべて受講した学習者に限ったため、音読群には15名、非音読群として速読練習が行われた群は28名であった。処遇方法の一貫性を確保するために、ミントアプリケーションズ株式会社によるマルチメディアプレーヤー・ミントが、両群共に使われ、音読群では、音韻符号化の自動化を目指した一斉音読がなされた。言い換えれば、扱う範囲の文章内容を解説した後で、チャンク化された文字を見ながら、チャンク模範音声を聞いた直後に、「自分が意味をわかった上で、かつ、相手に意味を伝えるつもりで」発声した。

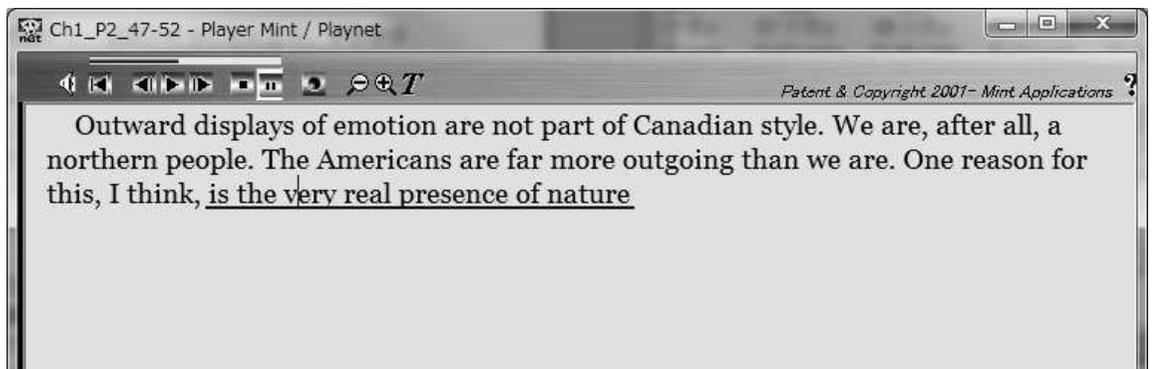


図1. チャンク提示をするCALLソフトウェア *Player Mint*

英語力の測定の問題材として英検準2級の過去の問題を使用し、読解力に関しては、問題正解率だけでなく、WPMや読解効率（WPMに問題正解率をかけたもの）も収集した。こうした英語力が前期後期それぞれの最初と最後両方で、1年間で合計4回測定された。その結果、非音読群に比べて音読群で、WPMについて

での有意な伸長効果があった。他方で、リスニング力を伸ばす効果は、非音読群に比べて音読群で、検知されなかった。

1年間の授業を終えた時点で、12項目からなるアンケートに対し、5段階評価を学習者につけてもらった結果を報告する。音読群が非音読群と比べて、学習者からの評価が高かったものは、音読群にリスニング力を伸ばす効果がなかったにもかかわらず、リスニング力が付いたといった項目や、音読処遇に対する肯定的な満足度を測定する項目で学習者が肯定的な評価をしていた。また、音読群が非音読群と比べて、学習者からの評価が高かったものは、音読群に非音読群と比べて読解正解力を伸ばす効果がそれほどなかったにもかかわらず、読解内容をイメージする力が付いたとの肯定的な評価が下されたことがわかった。

	この授業のトレーニングに満足していますか？	前と比べて、英文読解は好きですか？	前と比べて英文読解に対する自信がついていますか？	前と比べて、文の切れ目（チャンク）を見つけやすい。	前と比べて、「リスニング力」がついていますか？	前と比べて、「音読」の速度が上がっていますか？	前と比べて、英文理解の速度が上がっていますか？	意味の切れ目（チャンク）を意識しながら読む。	文構造を考えながら読む。	頭の中で日本語に訳さずに理解する。	頭の中で文字を音声化（頭の中で発音）しながら読む。	内容をイメージ（頭の中で画像化）しながら読む。
全体平均	3.7	3.8	3.2	3.4	3.9	3.5	3.4	3.4	3.9	3.5	3.4	3.8
音読群平均	4.1	3.9	3.4	3.5	4.2	3.9	3.5	3.9	3.5	3.9	3.7	4.2
非音読群平均	3.5	3.8	3.1	3.4	3.8	3.4	3.4	3.1	3.4	3.3	3.3	3.6
音読群平均 マイナス非 音読群平均	0.6	0.2	0.3	0.2	0.4	0.5	0.1	0.7	0.3	0.2	0.3	0.6

図 2. アンケート結果の比較 1

最後に、群の違いを考慮せず、読解正解率、WPM、読解効率それぞれの点で順位付けを行い、その順位の上位と下位の学習者の評価の違いを報告する。総じて、下位に分類される学習者がチャンク音読による学習方法を支持する結果が得られた。

本研究は科学研究費基盤 C 課題番号 24501196「英文速読能力を向上させるチャンク音声提示法の研究」による。

参考文献

神田明延・湯舟英一・田淵龍二・山口高領・池山和子・鈴木政浩. (2012). 『チャンク単位の音声訓練が読解効率に与える影響』, 第 52 回 LET 全国大会発表